六月の一週目に、怖い寄生虫にとりつかれたカタツムリの話をしました。登下校中に、「**おいあくま！**」と、ご注意を受けた人はいませんか。

さて、今日もカタツムリに関係する話。今から言うヒントで、この人が誰かを当てられたら超人です。

ヒント①　アメリカ人。十二歳になるまでに、カタツムリの新種を二種発見しました。

まだ、分かった人はいないでしょう。次のヒントでひらめいた人は、達人です。

ヒント②　学校嫌いの少年でした。高校を二度退学させられています。一つの高校の退学の理由は、机に彫刻したことだったそうです。カタツムリの絵でも彫ってしまったのかしら…。

さすがに、まだ分かった人はいませんね。ちょっと安心しました。超人・達人ばかりの学校だったら、少し気味が悪いものね。でも、次のヒントで反応してくれる人がいてくれるとうれしいな。このヒントで正解した人は、賢人です。

ヒント③　一八七七（明治十）年六月に来日。横浜から新橋に向かう蒸気機関車の車窓から「大森貝…」おっ、反応してくれた人がいる！

そうです。「大森貝塚」を発見したことであまりにも有名な、「モースさん」が正解。五・六年生の社会科の参考書にはモースさんの名前が出てくるのではないかな。

エドワード・シルベスター・モースさんは、東京大学の教授となり、三回来日、通算約四年間にわたり日本に滞在しました。

日本が大好きだったモースさんは、日本人の暮らしにかかわるたくさんの品々を収集し、多数のスケッチも残しました。

モースさんは、左右の手で、別々の文章や絵を描くこともできる、両手両利きの器用な人で、講演会で、両手にチョークを持って黒板にスケッチを描くと、それだけで拍手喝采を浴びるほどだったそうです。

あるとき頼まれて、神田の小学校で講演しました。その学校の校長先生がお礼に何かさし上げたいと申し出ると、モースさんは、「今日の話を聴いた子どもたちが、道で会ったとき、挨拶してくれれば、それが自分には何よりのお礼である。」と、おっしゃって帰っていったのだそうです。

私も仕事柄、色々な学校にお邪魔することがあります。武蔵野市のある共学校に行ったとき、駅からのバスでその学校の児童と一緒になりました。みんな、バスに乗るときに「お願いします。」降りるときに「ありがとうございます。」と、気持ちの良い挨拶を運転手さんにしていました。

大田区のある共学校に行ったときは、受付の場所が分からなくて、近くにいた四年生のお嬢さんに聞くと、それはそれはすてきな笑顔で「どうぞこちらです。」と、案内してくださいました。思わずポ～っとなってしまいましたねぇ。

勘違いしてもらっては困るのですが、君たちに「挨拶をきちんとしなさい。」なんてことを言う気は全然ありません。そもそも挨拶は、人に言われて、強制的にやらされるものではありませんから。

二つの学校の児童の皆さんの様子を見ていると、誰かにやりなさいと言われたから、しかたなくやっているという感じではなくて、相手の目を見てニッコリと、実に気持ちのいい挨拶なのです。きっと誰かが勇気を持って始めた挨拶が、徐々に広がっていったのでしょうね。これって、素晴らしいことです。

君たちのうちの誰かが、最初の一人となって、始めてくれた気持ちのいい挨拶の輪が自然に広まって、挨拶を受けた人たちが幸せな気持ちでポ～っとなるようなシーンを想像すると、ワクワクしてきます。

モースさんの気持ち、なんだかとてもよく分かるなぁ。

（立教小学校校長　田代　正行）